

Tile Side Story.

2

グセアルス | guse ars

時を超えて、陶片がつなぐ
アートワーク

guse ars

2010年に結成した、東京を拠点に活動する村橋貴博・岩瀬敬美によるアーティストユニット。海や川に漂着する陶片を拾い集め、それを発想の出発として作品制作、発表を続ける。グラフィックやディスプレイなど、デザインの仕事も行っている。プロダクトとして「Washed Pattern Tile」シリーズを販売。



陶片から新たな模様を生み出すプロジェクト

guse ars(グセアルス)は、村橋貴博さんと岩瀬敬美さんのアーティストユニット。村橋さんはコラージュ、岩瀬さんはドローイング、それぞれの創作活動を行っていたが、2010年鎌倉の海に遊びに行ったことをきっかけに二人のプロジェクトが始まった。

岩瀬「友だち何人かと海に行って、貝殻とか拾うのが好きだったんですね」

村橋「ビーチコーミングをしていると、たまたま陶片が落ちていて、それが何か二人に響くものがあった、これで何か一緒にできないかとユニットがスタートしました」

二人が考えたのは、陶片に残った柄のかけらを抽出し、再構成して新しい模様を生み出すプロジェクト。「Washed Pattern」と称する模様の制作に早速取り掛かった。

村橋「拾った陶片からパターンを作る作業。千本ノックじゃないけど、お互いにひたすら作り続けましたね」

岩瀬「そのとき作ったのは500パターン。コピー用紙ひと束分のパターンを作ろうと始めました」

当初は模様を作ることが目的だったが、展示ごとに表現するテーマを設けて制作するようになった。

村橋「たとえば、陶片自体が海から届けられ進化していくと考え、シダ植物が陸に上がって次のシダになるまでの生活サイクルを模様に描くという感じです」

岩瀬「花をテーマにした『スイミングシーズ』では、陶片を流れ着いた種と考え、そこから架空の花が生まれるという世界観を描きま

した」

村橋「陶片に残された文字のかけらをもとに“文字組されたような模様”を描くパターンもありましたね」

陶片があれば無限にパターンを作ることができる二人のアートワークは、平面に限らず立体の作品も生み出した。

村橋「海のナッツ、架空のナッツを生み出す『シーナッツ』というシリーズで、ヤシの実のように海に流れ着いた白いオブジェを作りたいかなって思いましたね」

岩瀬「それまでは柄のある陶片を探していましたが、柄がすり減った無地の陶片も探すようになりました」